

# やり直しのための 通信数学

三谷 政昭

## 第18回 ウェーブレット変換のまとめ (その3)

### 多重解像度解析におけるウェーブレット分解/合成アルゴリズム

今回は、ウェーブレット変換の最大の特徴である“多重解像度解析”における基本原理の分解/合成アルゴリズムを取り上げて、全体的な処理の概要を解説した。今回は、多重解像度解析とウェーブレット、スケーリング関数の関係を中心に説明する。続いて、フィルタ・バンク構成の基礎をなすウェーブレット分解/合成のアルゴリズムを導き、行列による表現との対応づけを行う。(筆者)

#### ツースケール数列と信号表現

まず、スケーリング関数  $\varphi(t)$  とマザー・ウェーブレット  $\psi(t)$  が、整数  $n$  に対して、

$$\varphi(t) = \dots + p_{n-1} \varphi(2t - (n-1)) + p_n \varphi(2t - n) + p_{n+1} \varphi(2t - (n+1)) + \dots \quad (1)$$

$$\psi(t) = \dots + q_{n-1} \varphi(2t - (n-1)) + q_n \varphi(2t - n) + q_{n+1} \varphi(2t - (n+1)) + \dots \quad (2)$$

とツースケール数列  $p_n$  と  $q_n$  により表される。

いま、簡単なツースケール関係を、

$$\varphi(t) = p_0 \varphi(2t) + p_1 \varphi(2t-1) \quad (3)$$

$$\psi(t) = q_0 \varphi(2t) + q_1 \varphi(2t-1) \quad (4)$$

とし、信号  $s(t)$  が前回[2007年6月号, pp.160-168の「第17回 ウェーブレット変換のまとめ(その2)」]で説明した補間係数  $w_0$ ,  $w_1$  を用いて、信号波形  $s(t)$  が、

$$s(t) = w_0 \varphi(t) + w_1 \varphi(t-1) \quad (5)$$

で与えられるとき、

$$s(t) = \tilde{w}_0 \varphi\left(\frac{t}{2}\right) + \tilde{w}_1 \varphi\left(\frac{t}{2}-1\right) \quad (6)$$

と表すことを考えてみよう。なお、 $\tilde{w}_0$ ,  $\tilde{w}_1$  はそれぞれ補間係数、ウェーブレット係数に相当する。

さて、式(3)と式(4)の変数  $t$  に  $\frac{t}{2}$  を代入すると、

$$\varphi\left(\frac{t}{2}\right) = p_0 \varphi(t) + p_1 \varphi(t-1) \quad (7)$$

$$\psi\left(\frac{t}{2}\right) = q_0 \varphi(t) + q_1 \varphi(t-1) \quad (8)$$

という関係が得られるので、式(6)に代入して、

$$s(t) = \tilde{w}_0 \{p_0 \varphi(t) + p_1 \varphi(t-1)\} + \tilde{w}_1 \{q_0 \varphi(t) + q_1 \varphi(t-1)\} \\ = (p_0 \tilde{w}_0 + q_0 \tilde{w}_1) \varphi(t) + (p_1 \tilde{w}_0 + q_1 \tilde{w}_1) \varphi(t-1) \quad (9)$$

となる。式(5)と等値することにより、

$$\begin{cases} w_0 = p_0 \tilde{w}_0 + q_0 \tilde{w}_1 & \dots\dots\dots (10) \\ w_1 = p_1 \tilde{w}_0 + q_1 \tilde{w}_1 & \dots\dots\dots (11) \end{cases}$$

という関係、すなわちウェーブレット合成の基本式が導かれる。なお、式(10)と式(11)の関係を行列で表すと、

$$\begin{pmatrix} w_0 \\ w_1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} p_0 & q_0 \\ p_1 & q_1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} \tilde{w}_0 \\ \tilde{w}_1 \end{pmatrix} \quad (12)$$

となる。

逆に、式(10)と式(11)を  $\tilde{w}_0$  と  $\tilde{w}_1$  について解いてみる。式

(10)と式(11)の両辺に、それぞれ  $p_0$ ,  $p_1$  を乗じて、

$$\begin{cases} p_0 w_0 = p_0^2 \tilde{w}_0 + p_0 q_0 \tilde{w}_1 \\ p_1 w_1 = p_1^2 \tilde{w}_0 + p_1 q_1 \tilde{w}_1 \end{cases}$$

となり、さらに両辺を加え合わせて、

$$p_0 w_0 + p_1 w_1 = (p_0^2 + p_1^2) \tilde{w}_0 + (p_0 q_0 + p_1 q_1) \tilde{w}_1$$

の関係が成立する。このとき、ツースケール数列には、

$$\begin{cases} q_0 = p_1 \\ q_1 = -p_0 \end{cases}$$

で表される関係があることから、

$$p_0 q_0 + p_1 q_1 = p_0 p_1 - p_1 p_0 = 0$$

となるので、

$$\tilde{w}_0 = \frac{p_0 w_0 + p_1 w_1}{p_0^2 + p_1^2} \quad (13)$$

と算出できる。また、式(10)と式(11)の両辺に、それぞれ  $q_0$ ,  $q_1$  を乗じて、同じように計算すれば、

$$\tilde{w}_1 = \frac{q_0 w_0 + q_1 w_1}{q_0^2 + q_1^2} \quad (14)$$

と求められる。よって、

$$\begin{cases} \frac{p_0}{p_0^2 + p_1^2} = \tilde{p}_0 \\ \frac{p_1}{p_0^2 + p_1^2} = \tilde{p}_1 \end{cases} \quad (15)$$

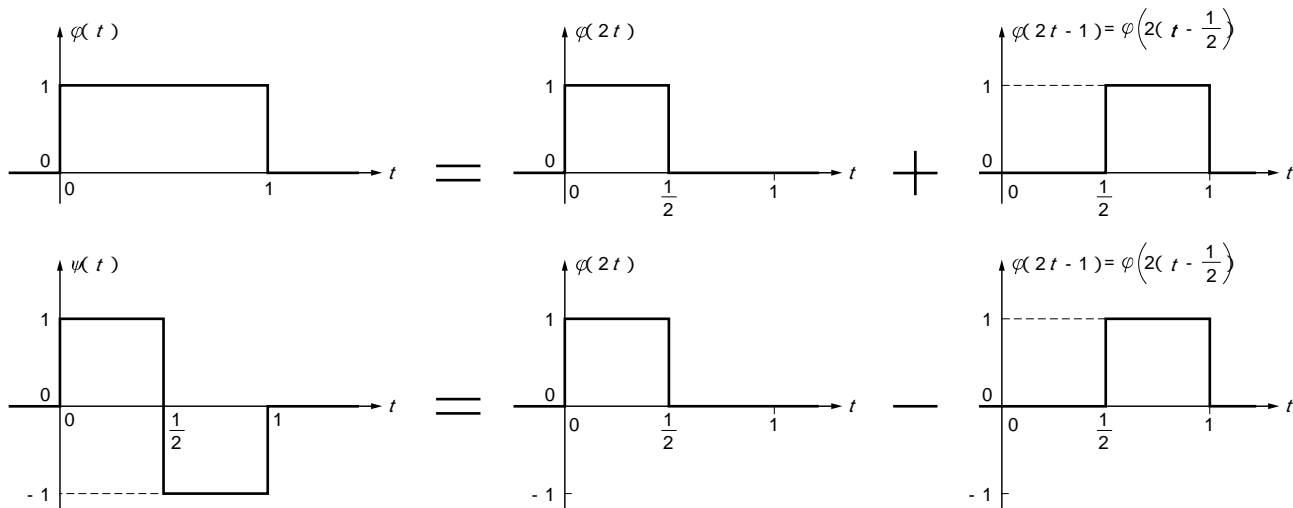


図 18.1 ツースケール関係(ハール・ウェーブレット変換,  $p_0=p_1=1, q_0=1, q_1=-1$  の場合)

$$\begin{cases} \frac{q_0}{q_0^2 + q_1^2} = \tilde{q}_0 \\ \frac{q_1}{q_0^2 + q_1^2} = \tilde{q}_1 \end{cases} \dots\dots\dots (16)$$

$$\begin{cases} p_0 = p_1 = \frac{1}{\sqrt{2}} \\ q_0 = p_1 = \frac{1}{\sqrt{2}}, q_1 = -p_0 = -\frac{1}{\sqrt{2}} \end{cases} \dots\dots\dots (20)$$

と置くことにより, ウェーブレット分解の基本式として,

$$\tilde{w}_0 = \tilde{p}_0 w_0 + \tilde{p}_1 w_1 \dots\dots\dots (17)$$

$$\tilde{w}_1 = \tilde{q}_0 w_0 + \tilde{q}_1 w_1 \dots\dots\dots (18)$$

が得られる. ここで, 式(17)と式(18)の関係を行列で表すと,

$$\begin{pmatrix} \tilde{w}_0 \\ \tilde{w}_1 \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \tilde{p}_0 & \tilde{p}_1 \\ \tilde{q}_0 & \tilde{q}_1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} w_0 \\ w_1 \end{pmatrix} \dots\dots\dots (19)$$

となる.

たとえば, ツースケール数列を,

としたとき, 式(15)と式(16)より,

$$\begin{cases} \tilde{p}_0 = \tilde{p}_1 = \frac{1}{\sqrt{2}} \\ \tilde{q}_0 = \frac{1}{\sqrt{2}}, \tilde{q}_1 = -\frac{1}{\sqrt{2}} \end{cases} \dots\dots\dots (21)$$

であり, 式(3)と式(4)のツースケール関係は,

$$\varphi(t) = \frac{1}{\sqrt{2}} \varphi(2t) + \frac{1}{\sqrt{2}} \varphi(2t-1) \dots\dots\dots (22)$$

$$\psi(t) = \frac{1}{\sqrt{2}} \varphi(2t) - \frac{1}{\sqrt{2}} \varphi(2t-1) \dots\dots\dots (23)$$

と表される. なお, ハール・ウェーブレット変換におけるツースケール関係を図 18.1 に示す.

また, 信号のウェーブレット分解の基本式は, 式(13)~(18), および式(20)より,

$$\begin{cases} \tilde{w}_0 = \frac{1}{\sqrt{2}} w_0 + \frac{1}{\sqrt{2}} w_1 \dots\dots\dots (24) \\ \tilde{w}_1 = \frac{1}{\sqrt{2}} w_0 - \frac{1}{\sqrt{2}} w_1 \dots\dots\dots (25) \end{cases}$$

となる.

一方, ウェーブレット合成の基本式は, 式(10)と式(11), および式(20)より,

$$\begin{cases} w_0 = \frac{1}{\sqrt{2}} \tilde{w}_0 + \frac{1}{\sqrt{2}} \tilde{w}_1 \dots\dots\dots (26) \\ w_1 = \frac{1}{\sqrt{2}} \tilde{w}_0 - \frac{1}{\sqrt{2}} \tilde{w}_1 \dots\dots\dots (27) \end{cases}$$

で与えられる.

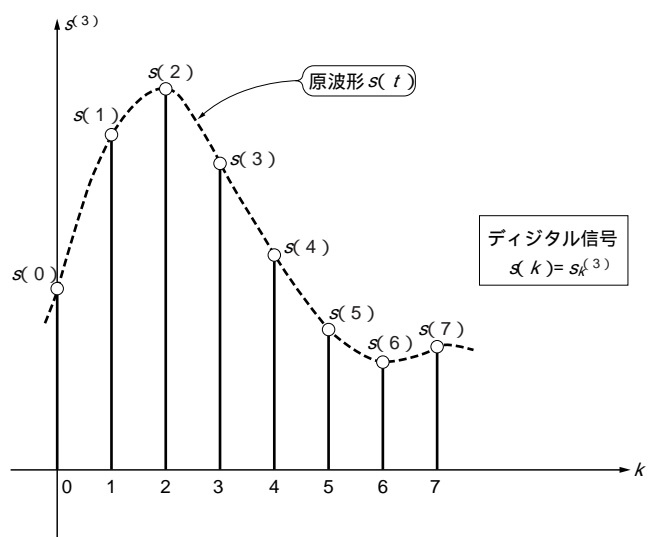


図 18.2 原波形とデジタル信号( $L=3$  で,  $N=2^L=8$  サンプルの例)